

平成 26 年度第 1 回企業向け人権啓発講座

日 時：平成 26 年 5 月 27 日（火）14：30～16：30

場 所：京都平安ホテル「白河の間」（2 階）

テーマ：企業と人権～同和問題を改めて考える、いま大切なこと～

講 師：馬場 周一郎（西日本新聞企画委員）

○馬場 私は 1980 年代から、部落差別いわゆる同和問題の報道に携わってきました。知れば知るほど部落差別は実に不思議な差別だという気がします。部落差別は 1871 年、明治 4 年のいわゆる「解放令」により、形の上ではなくなったわけです。しかし、それからざっと 140 年以上たった今日、なお、この問題が主要な人権課題であり、解決に至っていない不思議さなのです。

京都は『オールロマンス事件』という、同和問題を考えるうえでエポックメイキングな出来事が起きた所です。解放令以降も差別はなくなりませんでした。そこで奈良県の被差別部落の若者が中心となって京都で全国水平社を創立しました。

1922 年、大正 11 年の 3 月 3 日です。ここ京都の旧岡崎公会堂、今の京都市美術館別館で全国水平社は結成されました。運動は差別的な言動をした相手に糾弾を行うというものでした。ところが、多くの国民の意識は、差別する方が悪いのだという方向には向かわず、「糾弾は怖い。」「あいつらは違う。」というゆがんだ意識を形づくることになったのです。

それから時代が下って、戦後です。ここで『オールロマンス事件』です。

『オールロマンス』という雑誌がありました。その雑誌に京都市役所の職員が短編小説を寄稿したのです。この小説は被差別部落の居住環境、生活実態を差別的に描写したとされています。実は、そうではありませんでした。実際は被差別部落の話ではなく、在日朝鮮人のスラムが描かれていたのです。

そうだったのに、なぜ『オールロマンス事件』がエポックメイキングになったのか。

部落解放全国委員会、これは部落解放同盟の前身です。その京都府連は、この小説は被差別部落に対する差別意識を助長し、行政は劣悪な実態を放置してきたとして京都市の責任を追及しました。京都市の職員が書いたのは、在日朝鮮人の実態だったかもしれない。しかし、それはとりもなおさず、劣悪な環境という意味において、在日朝鮮人部落も被差別部落の居住環境も全く同じであり、行政の責任という一点において、この問題を被差別部落の問題だとして追及したのです。

このときの闘争スタイルが、その後のいわゆる行政闘争の先駆けとなりました。つまり、差別は一体、どこから生まれてくるのか、それは非常に劣悪な環境を放置してきた行政そのものに、その責任がある。そうした実態があるから、差別意識が生まれるのではないか、意識というのは単なる観念の亡霊ではない。実態があるから差別意識は生まれる。マルクス主義の理論には、下部構造と上部構造であって、経

済の実態が私たちの意識を形作るのであるという考え方があります。当時の委員会の人たちの中に、そのように考える方々がおられたのだと思います。

解放令は出たけれども、差別はなくならなかった。差別意識は消えなかった。その理由は、被差別部落の非常に低位な、劣悪な生活環境にあるのだと考えたのです。

となれば、これは行政の責任において環境を改善すべきである、その闘争をすることが差別意識を変えることになるのではないかというレベルに至ったのです。

そういう意味で、この『オールロマンズ闘争』というのは、正に行政交渉を進めるうえで、画期的な運動の先駆けとなりました。

つまり差別事件の根本には部落の低位な実態があると規定して、その改善を迫っていくものであり、全国的な運動発展の起爆剤になったのです。

しかし、これは、後に運動が事実上行政闘争に塗りつぶされていったという面を持ちます。同和問題に関する全てのマイナス現象は行政の責任という、ややそこに重きが置かれていったということがあります。

ですが、この側面を割り引いたとしても、『オールロマンズ闘争』の意義は今なお光を放っていると申し上げておきます。

『オールロマンズ闘争』は、その後の「同和問題の早急な解決は国の責務であり国民的課題」という同和対策審議会答申に結実したのです。同和対策審議会答申によって生まれたのが、1969年の同和対策事業特別措置法です。

おさらいをします。

同和対策審議会答申は1965年、今から49年前に出されました。来年で50年になります。

この答申によって特別措置法が出来ました。

この法律は、その後何度か名称は変わりますが、1969年から2002年の3月まで、33年間にわたって継続されました。事業総額はざっと約15兆円です。これだけのお金が同和地区の環境改善に投下されたわけです。ですから、この効果というか、この役割は絶大なものがありました。

事業が本格的に開始される前は、同和地区と言え、軒が低く、共同のトイレが一つ、もちろん上水道、下水道ともないような、そして道という道もなく、曲がりくねった道で、三尺道路と俗に言われていた狭い道路ばかりの劣悪な環境でした。しかし今、この法律が33年間施行されたことによって、高層住宅が立ち並ぶ地域に変わりました。道路も広くなりました。地区の外観は大きく変わりました。これが物的事業、環境改善の最大の成果と言っていいかと思います。

また、小中高校の教科書に、それまで全く触れられてこなかった同和問題が記述され、教育、啓発が広がっていきました。

さらに、部落史の研究が進み、いわゆる「近世政治起源説」は否定され、ケガレ論も一石を投じられました。

「近世政治起源説」が否定され、政治権力が作ったものでないのであれば、一体誰が作ったのか。それはひょっとしたら、私たちの中のケガレという意識が部落民への差別意識を生み出しているのではないか。ケガレというのは、相手がケガレた存在であるので、明治新政府が旧身分制度を形だけは廃止しても、私たちの意識の中にこびり付いている、染み付いた意識は、簡単に消えなかったのです。

ケガレと言うと、普通は何か悪いものが体内に伝染する、いわゆるケガレるという意味です。例えば、赤不浄とか黒不浄ですね。六曜もケガレの一種に入るかもしれません。

御所を散策しておりましたら、あることに気付きました。

ケガレと言いますと、普通は負のベクトル、つまりマイナスの方向にベクトルが働く。それは死の不浄、あるいは血の不浄など、どちらかって言うと忌中、忌み嫌う、忌避するという方にケガレというのはベクトルが作用しがちであります。しかし、私が気付いたのは、正のベクトル、逆のベクトルもあるということなのです。

今の大河ドラマは『軍師官兵衛』をやっていますが、その前は『八重の桜』がありました。そのとき、会津中将容保が京都守護職を拝命して、会津からこの京の地にやってくるわけです。この容保が御所に参内をするシーンが『八重の桜』で放映されました。容保が御所で、孝明天皇に拝謁するシーンです。『王城の護衛者』っていう本の中に司馬遼太郎さんも書いてらっしゃいますが、この容保は非常に孝明天皇の信任が厚かった。『八重の桜』の中で、この孝明天皇が自分の着ていた着物を、これは御衣（おんぞ）というのですが、この御衣を容保にプレゼントするのです。孝明天皇はこう言います。「余の御衣である。仕立て直して陣羽織にでもせよ。」と孝明天皇が容保に語り掛けるシーンです。非常に印象的でした。これはもう一つのケガレなのではないか、つまり正と負、そんなものがあるかどうか分かりませんが、もし、負のケガレというものがあるとすれば、それは、忌避するという意味での黒不浄や赤不浄なのです。孝明天皇が容保に、自分の着ているものを与えた。一度でも、自分が袖を通した衣服だからこそ、正の磁場を帯びる。つまり高貴な方が着られたものだからこそ価値がある。体に密着して袖を通したからこそ価値があるという、通説的なケガレ論とは真逆の、もう一つのケガレの正体というのをドラマに見た思いでした。そのことを、御所を散策していて思い出したのです。

答申と特別措置法による成果に戻ります。

企業が採用選考時の書類を社用紙から統一応募用紙に切り替えたということが挙げられます。これも画期的なことです。公正採用選考へ企業の意識が非常に深まりました。

また、同和地区住民の流動化があります。かつては固定的で流動化しなかった同和地区から住民が、流出し、また流入してくる。つまり、地区から人が外へ出て行き、そして外から人が地区内に入ってく

るということです。90 パーセントから 100 パーセントは入れ替わっているとされる地区もあるようです。となると同和地区とは一体何であるのか、あるいは部落民とは一体何であるのかと、その定義すら今はあやふやなものになりつつあるのではないかという問いさえ生まれてくるのです。

また、夫か妻のどちらかが同和地区外出身という夫婦が増加しています。かつてはその地域の中で結婚をし、子供を産み育てることが一般的でしたが、今は通婚、つまり夫か妻のどちらかが同和地区外出身というカップルが増加している。

一方、同対審答申以後に問題化したものもあります。

それは『部落地名総鑑』という、同和地区を一覧化した本、これが売られ、企業が購入した。また、えせ同和行為、えせ同和もあります。

著作権が消滅した本の中身をかき集めたり、法務省のホームページから抜粋したようなものを集めて、一冊で7万円も8万円もの値段を付けて、企業に持ち込む。それを買う企業がいる。やっかいだから適当に付き合っとうという企業があります。そうした所を狙い撃ちして、「差別を商う行為」が進んでいったということです。

そして、運動体に厳しくなりますが、部落差別解消の手段のはずの同和事業が、自己目的化していったということです。様々な不祥事も起きました。

同対審から 50 年、特別措置法施行 33 年の間に、全ての問題が一直線に、一気に解決に向けて進んできたわけではありません。光もあれば影もある。良い面と悪い面を併せ吞みながら行政の取組、部落解放同盟などの運動は進んできたのです

言葉を換えるなら、行政が施策の対象とする「同和問題」は、同対審が描いた解決のイメージに一定レベルまで到達しましたが、国民の意識といった「部落問題」の解決は道半ばなのです。

2012 年 12 月 26 日に発行された『週刊朝日』についてお話をします。

大阪市長の橋下さんの顔が、表紙一面に大きく出た雑誌です。これを見て私は本当にびっくりするというよりも、ジャーナリズムにある身として、こうしたものが出版されたことに、形容できないほどの衝撃を受けました。

まず、表紙の顔写真の下にある「ハシシタ 救世主か衆愚の王か」という見出しです。「橋下徹の DNA をさかのぼり本性をあぶり出す」とも書かれています。

私が、なぜ驚いたかという、ハシシタという名前です。この人は橋下（はしもと）さんです。にもかかわらずハシシタという呼び方をしている。

筆者佐野真一氏と『週刊朝日』は、一体何が言いたいのか。橋下（はしもと）氏は自分を橋下徹（はしもととおる）だとしているけれども、本当はハシシタですよと言っているのです。佐野氏、『週刊朝日』は、ハシシタという名前から何かを推察してくださいと暗示しているわけです。

表紙の写真にも注目してください。橋下さんの顔の右半分が暗いですね。左半分が明るいですね。見た瞬間、画像処理をしていると確信しました。表紙を開くと記事があります。こう書いてあります。「恐ろしく暗い目をした男。テレビカメラが回るとわざとらしい作り笑いを浮かべ、回っていないと分かる」と、素に戻って暗い顔になる。この男は裏に回るとどんな陰惨なことでもやるに違いない。」

「ははあ。」と思いましたね。この写真は明らかに画像処理で顔の右半分が明るく、左半分を暗くし、しかも背景のパネルを塗りつぶして不気味さを演出している。表と裏の顔を持つという記事を写真で印象付けるための画像処理だったと思います。画像処理は報道の「絶対禁じ手」であり、犯罪でもあります。

これは相手を抹殺するためにやることで、報道ではありません。

次の記事を見てまた驚きました。

「一番の問題は、敵対者を認めないこの男の非寛容な人格であり、その厄介な性格の根にある本性である。そのためには橋下徹の両親や、橋下家のルーツについてできるだけ詳しく調べ上げなければならない。取材班は彼の血脈をたどる旅に出た。」

なぜ血脈をたどらなくてはいけないのでしょうか。

佐野氏の記事の根底には、「血脈が本性を生む。」との発想があります。

しかし、人の生き方が「血脈」で解明されるはずがないのです。「血脈」によって私たちの存在が規定されるはずがありません。

佐野氏及と取材グループには一片の人権感覚も働いていない。出版元の朝日新聞出版、これにも全くチェック機能が働かなかった。これはどれだけ言い尽くしても言い尽くせない究極の人権侵害なのです。

橋下徹さんはこうおっしゃっています。

①血脈主義は身分制度の根幹であり、優生思想、民族浄化思想にもつながる。アメリカでの人種差別、ヨーロッパにおけるナチズムにも匹敵するくらいの危険な思想だと僕は考える。（政治家としての）政策論などどうでもよく、血脈を暴くことだけを目的とするこういう報道が必要というなら朝日新聞は堂々と社会にその考えを示すべきだ。

②僕がどう論じられようが、ある意味仕方がない。しかし、この血脈主義を肯定すると、僕だけの問題ではない。僕の子供や孫までの否定につながる。僕は公人だが、人間でもある。

③僕は実父に育てられた記憶はない。それで、なぜ、実父の生き様が僕の人格に影響するのか。影響しているという週刊朝日の連載目的を肯定するなら、それは血脈主義そのものだ。そうではなく、僕が母親にどう育てられ、育ち、友人関係がどうだったのか。こちらが僕の人格形成の主因ではないのか。ということでもあります。

私は橋下さんにお目に掛かったことはありません。そして橋下さんの政策が 100 パーセントいいかど

うかは分かりません。しかし、もし彼の政策が受け容れられないのであれば、それは政策論で是非を問
い、最後は選挙で、失職させればいいだけの話です。彼を失脚させるために、責任を取りようのない出
自を、幼い頃に別れたお父さんの、顔さえ知らないようなお父さんの系譜をたどって行って、それを暴
く。それが今日の橋下徹の「非寛容な」人格を形成している主因だという発想は、正に、これこそ差別
そのものではないですか。私は、橋下さんが被差別部落の出身であるかどうかは知りません。知る必要
もありません。そんなものが一体何なのですか。しかし『週刊朝日』と佐野氏は、それが重要だと言っ
ているわけです。橋下徹を分析する上でこれは欠かせない重要な要素だと言っているのです。しかし、
自分で責任の取りようがない出自を、なぜ政治家橋下が取らなくてはいけないのか。彼をもし危険な政
治家だと思えば、政策論で勝負し、そして最後は審判を仰ぐべきなんです。にもかかわらず、『週刊朝
日』という老舗の雑誌がこうした記事を平然とノーチェックで載せる。ここに部落差別の今日的断面が
あるということを、是非知ってもらいたいのです。

橋下さんの『週刊朝日』の記事の場合もそうですけれども、戸籍等々の個人情報を大量に不正取得す
る事件というものが後を絶ちません。

名古屋の情報会社が全国にネットワークを張って戸籍を取る。不正に役所から戸籍を取るという事実
が発覚し、これに行政書士とか司法書士たちが絡んでいた事件がありました。

何のためにこうした戸籍を欲しがするのか。逮捕された関係者が言っていました。この戸籍は何のため
に必要とされているのかというと、大半は結婚なのです。結婚に際して相手の身元を知りたい、知ろう
とするというリクエストがやっぱり寄せられるということです。これを受注して、戸籍謄本を不正取得
したある関係者が裁判でこんなことを言っていました。私たちは商売ですから、リクエストが来れば、
それに応えなくちゃいけない。私も悪いと思っていましたが、それは飯の種です。どうか、願いま
す。そういう身元調査を必要としない社会にしてください。そうすれば、私は、そんなことをしてい
ない。こういう風に言っていたようです。

^{ぬす}盗っ人にも三分の理ということがあります。ぬけぬけとよく言うよと感じる一方で、言っていること
は正しいですね。つまり、こうした身元調査を必要としない社会こそが、不正をする、しないより、実
はもっと大切なのです。究極はそれを目指さないといけない。しかし現実問題として、現実は今、戸籍
謄本を入手してくださいと言われていて、こういう探偵会社や興信所は、それは仕事だからやります、
ちょっと後ろめたいけどやりますということをやっている。しかし、起訴されて公判廷に行くと、私は
実はやりたくなかった。それはお客がそういうことを望むからです。本当を言うと、こういうことを私
たちに依頼できないような、依頼をすること自体が恥となるような社会、究極的には身元調査を必要と
しない社会そのものを作っていただけませんか、こういうことを業者が言います。別に居直りでも何
でもないのですが、一理はあります。つまり、私たちは表層的には、こういうことに携わる興信所、あ

るいは探偵会社を厳しく指弾をしますが、本当は、実のところは、それを依頼する側にこそ問題があるのです。あるいは依頼が必要とを感じる、この世の中の空気そのものに問題があるのです。究極的に目指すべきは、不正取得をどうやって止めるかではなくて、そういうことを必要としない社会、身元調査を必要としない社会そのものをやっぱり目指す。これが私たちの英知ではないでしょうか、そう思います。そんなことをまだやっているのかという、言ってみれば「人権の世間」というものを作っていく。「世間」に顔が向けられないといったような社会を作る。このことが理想ではないかと思います。

さて、現代社会の人権問題は非常に多様化・複雑化しております。女性、労働、雇用、セクハラ、パワハラ、高齢者、子ども、障害者、生活保護、部落差別、風評被害、それから企業の社会的責任というCSR、そして紛争鉱物・・・・・・・・・・。

紛争鉱物というのは、聞き慣れない言葉かもしれません。

コンフリクトミネラルズ、紛争鉱物といいます。今、コンゴでは、地下に、スズ・金・タンタル・タングステン、そして、例えば、こうした携帯電話に非常によく使われる絶対の必須材料である希少金属等の有望な地下資源が、無尽蔵にある意味では眠っているわけです。しかし、資源があるからといってそれで国が富み、国民生活が豊かになるかというとそうではなく、逆に、あればあるほど、そこには様々な紛争の種がばらまかれるということになります。

ケニアの方で象牙の争奪戦が行われています。象牙が、イスラム過激派の資金源になっています。ですから、日本人は象牙の印鑑をたくさん使いますが、あんなものは使っちゃいけないと、滝田明日香さんという獣医さんがおっしゃっていました。日本人は印鑑に象牙を使うのが大好きで、この象牙が一体どこから来ているか、それは、アフリカゾウの牙です。射殺して得たその牙を日本と中国が買っている。その2国がその消費大国です。だから、業者の方には申し訳ないけど、私たちは象牙の印鑑を使っちゃいけないと、あちこちで申し上げています。

さて、話は戻りまして。コンゴのお話。このコンゴは資源があるゆえに非常に厳しいことが逆に行われている。先ほど申し上げた写真の自動小銃の兵士、彼らは少年兵です。少年兵が銃を持ち、そしてそれぞれが武装勢力化している。その一方で、8歳から9歳の子どもたちが劣悪な環境で銃に脅されて、資源の採掘をさせられている。

強制労働、そして児童労働、そして想像を絶する低賃金、劣悪な労働環境、そしてレイプ、虐殺等々、そして、それら採掘された資源は、一体どこで、誰に使われているのか、そしてまた、新たなテロを生んでいるということでもあります。

私たちは、なぜこんなにも広く世界のことにまで、人権状況について考えなくてはいけないのでしょうか。これまで企業にとって人権は狭い概念だったと思います。それは同和問題や、同和問題に関連して公正採用をどうやってやるかという一点に絞られていました。それら以外は、せいぜいセクハラやパ

ワハラまでの、自分の会社の中の自社内の問題が中心だった時代がありました。株主だけを相手にしていればいい、株主に配当することこそ企業の最大のミッションであるという時代がありました。しかし今は、株主だけを相手にしている企業が、永続性を持ち得ることは絶対にありません。自社だけの決算主義に陥るような企業に、明日はないと思います。ステークホルダーっていうのは狭い意味での株主だけではなくて、正に地域住民、それから消費者、もっと広く言えば地球環境もステークホルダーなのです。株主に配当さえすればいいという発想では、これからの企業は存立し得ないのです。

そしてバリューチェーンっていうのは、サプライチェーンという言葉に置き換えてもいいのですが、どこからものを調達し、そしてそれをどうやって加工して、それを皆さんの所にどのように届けていくかっていう、この企業の一連の流れのことを意味します。例えば、さっきのコンゴで、スズ・タングステン・金が採れた。これを、例えば携帯会社は必要として供給を受けるわけですが、その供給を受けるのはいいのだけれども、その供給が正しいルートによってちゃんと手を踏んで行われているか、透明性は確保されているのか、不正な手段を通過したものを我々が得ていることになっていないかということです。それが回り回って人権侵害に及んでいるということになれば、それはしてはいけないのではないか。それをしてしまえば、企業としての存立が問われかねないという意識が非常に強くなってきました。これは大きな転換です。

一言で言えば、人権は企業にとって、かつてはリスク管理でした。防衛的に、あれはやってはいけない、これはやってはいけない、マニュアル的な人権管理でした。しかし今はそうではありません。むしろ経営課題としての人権です。そのような考え方にシフトできない企業は、国際市場から撤退を余儀なくされるでしょう。

最後に申し上げたいことがあります。京都に参りまして、歴史の悠久性を改めて強く感じるわけがあります。

日本は非常に古い企業が、歴史を重ねた企業が多くあります。

大阪に四天王寺があります。この四天王寺は誰が建てたか、聖徳太子と言われています。太子は百済から3人の宮大工を招聘しました。3人のうち、金剛重光という人は、日本にとどまりました。そして578年に宮大工の会社、どんな会社組織だったかよく分かりませんが、金剛組という看板を上げました。これは世界最古の企業です。1430年以上の歴史を持っているのです。

明治中期の金剛組本社の写真を見つけ、これをきっかけにちょっと調べてみました。そしたら日本には創業200年以上の会社が、なんと3146社、帝国データバンク調査で。創業200年以上の会社、これだけの長い歴史を持った企業っていうのは、普通はヨーロッパのマイスターを育むような会社に多いのではないかとされるかもしれません。しかし、意外や意外、日本が3146社でダントツです。ドイツは837社、オランダは222社、フランスは196社、恐らくイタリアはもっとこれよりずっと少ないはず

ですね。創業 200 年以上の会社でこうです。創業 500 年以上の会社は日本に 158 社あります。それだけ長寿となると、帝国データバンクも、日本以外のことはよく分からないようです。さらに、創業 1000 年以上の会社は、この金剛組を筆頭に 7 社あります。建設業あるいは旅館というような企業が 7 社あるようです。

なぜこんなに日本には長寿企業、長く経営が続く企業が多いのでしょうか。それは、一つには、地政学的なことにあります。日本では天地が引っ繰り返るような、国家規模での争乱、戦争がなかったことにあると思います。なぜなら、ヨーロッパっていう所は、頻繁に侵略したり侵略されたり、国境線も今年と来年では変わるような、地政学的な地理にあります。常に国境線が変わる。そういう所にあつては、一つの企業が存続する条件っていうのは非常に厳しいことでしょう。

それはやっぱり、日本人の働くということへの意識、考え方、つまり、労働観や勤労観と無関係ではないと思います。

京都の隣は近江商人発祥の地ですね。近江商人の思想も有名ですが、それと並んで、江戸時代に出来た著名な商人道があります。石田梅岩という思想家が説いた石門心学という商いの思想です。梅岩はこう言っています。今ここに生きている商家の我々は、先祖からこの商いを預かっていると思えと。そして我々は先祖からの手代であるとして書き残しています。

手代なのです。だから先祖から連綿と続いてきたこの松明を、ここで不祥事によって潰すわけにはいかないのです。そういう思いが 1000 年企業を生み出し、さらに、たくさんの 500 年企業が後に続いている大きな理由だと思います。

目先の利益のために不正を働く。その結果、今までの信用、信頼されていたブランドが、一夜にして崩壊するのです。「築城 3 年、落城 3 日」。築城するには 3 年もの月日が掛かるのです。しかし、不祥事企業の落城は恐らく 3 日でしょう。信頼が崩れ落ちた瞬間、もう失墜の穴を埋めることができなくなる。今年は何としても売上げを伸ばさなくちゃいけない、あるいはどうしても赤字が出る、これは株主に申し訳が立たない。そのような狭い発想と悪魔のささやきが不正へと進ませるのです。しかし、そうした不正は損益のバランスシートでは全く割が合わない。それどころか、大きなツケとなって跳ね返ってくる。

そして、これからの企業はどうあるべきなのか。

川崎市にある日本理化学工業は、ダストレスチョーク、ごみが出ないチョークでシェア断トツの会社だと思います。ここの社員の 7 割は、障害のある方々です。会長に大山泰弘さんという方がいらっしゃる。この方は近くにある養護学校から、どうか 2 週間だけでもいいからうちの子供を使ってくださいと、昭和 30 年代初めに依頼を受けられた。まだまだこういう障害のある方々の社会参加や雇用の拡大が大きな社会的な課題や人権問題になる以前のずっと昔のことです。そのとき、大山さんが、仕事なんかせ

ずに、養護施設や養護学校におられた方が一番いいのではないですかと申し上げたら、養護学校の先生がおっしゃられたそうです。いえいえ、子供たちは誰かに必要とされたいのです、誰かに認められたいのです、お金じゃないのです、と先生がおっしゃられたとのことです。大山さんは、そんなもんかなとそのときは思ったそうです。そして、ある法事で隣り合わせになったお坊さんから、やはり同じようなことを言われたので、それならば2週間か3週間だけでも預かってみようかなと思って預けられたそうです。もちろん仕事ができるわけではありません。しかし別れのときに、この子供たちは本当に心からこの大山さんにありがとうと言って、それぞれのパフォーマンスでお礼を言ったそうです。それ以来、大山さんは何とかこの子たちを、いわゆる働くというのではなくて、自分が必要とされているんだという風に感じられるような、小さなこの空間ではあるけれども、この会社という空間で、それができないかと考え始めたそうです。以来、そうした取組をやっておられる。彼が立派なのは、単に研修をやって鍛えて、彼らを一人前にというか、いわゆる常人、健常者並みにしようとしなかったことです。つまり、工程に人を合わせるのではなく、人に工程を合わせるという哲学を実践されたのです。

障害を持っているわけですから、幾ら数量を何百グラムと言っても難しいのです。しかし、彼らは会社に通ってくるのですから、信号の青・黄・赤は理解する。となれば、^{はかり}秤を使うには、赤のチョークを作るときは、赤い粉に赤い分銅を使って、秤のこれとこれが平行になるようにしなさいと指導するのです。これならできるのです。何を何グラム、赤を350グラム入れなさいではないのです。ここにある赤の材料、赤の原料をここに入れて、そして、この赤い分銅とちょうどバランスが取れるよう粉の量を合わせる。これでできるのです。つまり、こういう工夫を、普通、私たちは工程にその人をどうしても合わせようとする、これは健常者の発想なのです。そうじゃない。正にその人が持っている、その人の能力とその人の個性に合わせた工程にする。そういう発想をしたのです。これは、働かせてやろうという上から目線では、決して生まれませんと思います。

企業の人権、その出発点と目標は何か。

それは、やはり働く人とその家族の笑顔を大切にすると、これに尽きるのではないかと思います。

えっ、そんな話かよと思われるかもしれません。人権の研修というと、憲法の第何条に何が書いてある、世界人権宣言はこうなっている、英語で人権の概念はこうなっているから日本語はこうなるんだという説明を1時間もなさる先生もいらっしゃいました。それはそれで意味のあることなのですが、実のところ、私は、そういう人権研修は^{なか}お腹いっぱいです。そして研修で良い人を作ろうとする、そんな研修に、私たちは^{へきえき}辟易しているのです。

そうではない。人間は、非常に良き人でもあり、悪き人でもあるのです。善悪の二つの顔を持っているのです。確かに、勇気と優しい情知を持っている、しかし、一方では打算と計算もしている。こういう清濁併わせ呑むのが人間なのですが、本質的には、何とか人のために少しでもお手伝いしたい

という善を志向するという存在だと思います。

働く人とその家族の笑顔を大切にすること。働く人を大切にしないでどうして人権なのでしょう。ブラック企業は働く人を人として見ない、極言すれば家畜として見ているわけです。そんな企業が永続するはずがないです。新聞沙汰になっている、あるいはテレビが採り上げる、様々な企業の不祥事はどこから出てくるのでしょうか。私のような新聞記者がいちいち聞いて回っているわけじゃない。全て内部告発です。だからそこでは明らかに働く人の人権が侵害されている。だからこそ、様々な不祥事が外に噴き出すわけです。

ですから、まず第1は、働く人とその家族の笑顔を大切にすること。2番目は、やはり喜びも悲しみも苦しみも共に分かち合うこと。そして3番目は、誰かの犠牲と涙の上に成り立つ経営は正しくないということ。

これらに企業の大小は関係ないのです。1万人の企業であれ、10人以下の企業であれ一緒です。誰かの犠牲と涙の上に成り立つ企業は正しくない。私も経営をやったことがあります。そしてどうやって人件費を減らそうかと考えたことがあります。そうしたら、だんだん苦痛になりました。逃げたわけではありませんが、私にはそういう意味では経営は合わなかったかもしれません。

消費者は企業に何を望んでいるか。それはあなたの会社の商品だから買うということです。あなたの会社のタクシーだから乗るのです。私たちは、安ければ買うんじゃないんです。安ければ乗るんじゃないんです。この会社が掲げる経営の理念に基づいた商品やサービス、そういったものが素晴らしいと思うからこそ購入し、利用するのです。

そして何よりも、皆様方の会社は、この町の誇りだと言われるような会社になっていただきたい。ランドマークになっていただきたいのです。ああ、あの会社がある町なんですかということもあります。あなたの会社でこの町は成り立っている、あなたの会社があること、これが自分たちの誇りになっているということもある。是非とも、皆さんには、そういう会社を目指していただきたい。そのような会社は、難しい人権の本を読まなくても立派に人権を尊重して経営がなされています、そういう企業だからこそ、地域の誇りになるのです。

最後の最後になりますが、やはり正しい道を堂々と歩く。瞬間的な利益を追うことは、恐らく100年の企業の大計からして、きっと大きなツケを2倍や3倍にして支払わなくてはいけない。「築城3年、落城3日」です。このことを心に留めていただきますようお願いして、話を終わらせていただきます。
＝終了＝